

芳賀の史跡めぐり

-5-

毛の国の文化を語るオブ塚古墳

この古墳は、赤城南麓のゆるやかな傾斜地にある芳賀地区最大の前方後円墳です。墳丘は、現状で全長約35m、その前端は道路敷に削り取られています。前方部幅約13m、後円部径約20m、高さは地表の低い南側から測ると前方部2.5m、後円部3.5m、北からは、前方部1m、後円部2mで、前方部の高さは、後円部のほぼ2分の1で、前方後円墳としては小規模ですが、墳丘は古い形をとどめていると言われています。周塹はないが、墳丘の南から東にかけて、土地が低くなっています。墳丘構築に採土したようだと思われず。

墳丘の後円部から円筒埴輪の列が南東から北に廻って発掘されました。その円筒列の直径は19mあり、円筒と円筒の間は、約1.5m〜2mでした。また、後円部から玉纏の太刀の柄部が2個、前方部からは埴輪馬、人型埴輪の破片が雑然と発見され、復元することは不可能でした。

内部主体は、後円部の南南西が開口しており、石材は安山岩で、自然石乱石積み袖無型といわれる横穴式石室です。床面に浮石を敷き詰めた石室は、埋葬部と墳塞部に分かかれ、全長は約5.5m、入口の幅は1.15mで奥に行くにしたがい広くなり、奥壁は1.56m、高さは1.7mあり、ちよつとかがめば中に入る事ができます。壁面は平らな自然石を選んで構成し、奥壁は大石2個を積みあげ、側壁にもさしわたし1m以上の石を所々に使っています。この石室内の出土品は、人骨4体、直刀4振、小刀

3振、刀子1振、鉄鏃50本、鏝鈎金具1個、耳環8個、土玉1個、須恵器の巨大な甕(かめ)の破片など。築造は6世紀後半と思われる。

墳丘、石室の原形が保たれて埴輪の配列や副葬品がほぼ完全な姿で発見されたのは、考古学研究上貴重なものと評価されています。昭和四十八年九月二十四日、前橋市指定史跡になりました。

☆エピソード1「名前の由来」

オブ塚古墳は、昔からこの地域では、別名オオツカまたはオボツカと呼ばれていて、それがオブツカに変わったのだろうということ。漢字ではなくカタカナ表記も庶民の昔の書き方であろうという事。

☆エピソード2「皇子ノ墳墓及火雨伝説」

発掘は昭和二十六年、前橋商業高校の生徒達が発掘させて欲しいと所有者宅に日参し、それまで

は所有者の横山昭氏の曾父母が「掘ると火の雨が降る」と言って掘らせなかつたが、前橋も空襲で火の雨が降ったからいいだろうと許可し、群馬大学の学生も加わり、共に横堀昭氏も汗を流した。

出土品はすべて群馬大学に保管されています。勢多郡誌(208頁)には、尾崎喜左雄博士(オブ塚古墳発掘責任者・元群馬大学教授)の執筆で「オブ塚古墳は県立前橋商業高等学校郷土班・・・中略・・・のそれぞれの援助によつたもの・・・以下略」と記載されています。

☆エピソード3「石室の奥に書かれたペトログラフ(線刻)」

近年、福田日出子氏の研究により、オブ塚古墳奥壁上段の石に線刻されている鶴と日冠のガラス

が確認されています。その他、甲骨文字、シュメールの転化した文字も見えます。

生涯学習奨励員

中山 洋子

4月の主な行事予定

4月7日(日)群馬県議会議員選挙投票日
4月20日(土)芳賀地区各種団体総会(芳賀公民館ホール)



標柱看板 (勝沢町 420 番地)



石室のペトログラフ